

伊藤先生の足跡

社会福祉学専攻主任

川上 富雄

伊藤先生は、1988（昭和 63）年 4 月 1 日より本学科講師に着任され、1994（平成 6）年度より助教授、2000（平成 12）年度より教授となられ、2023 年 3 月まで 35 年間教員として勤続されました。その間、2008-2009（平成 20・21）年度には大学院人文科学研究科社会学専攻主任を、2011-2012（平成 23・24）年度には文学部社会学科主任を、さらに、2013-2016（平成 25-28）年度には大学院人文科学第二研究科委員長を歴任されました。また、2017-2020（平成 29- 令和 2）年度には図書館長および学校法人駒澤大学評議員もお務めになりました。助教授時代の 1996-1997 年には英国バース大学に、そして引き続き 1997-1998 年には英国ランカスター大学にと 2 年間福祉国家イギリスの公的扶助研究を目的として在外研究をされています。

また、学外におかれても、1986-1986 年に日本社会事業学校連盟の『社会福祉を学ぶ人のために』編集委員、1986-1988 年に本社会福祉実践理論学会理事、2000-2006 年には社会福祉士及び精神保健福祉士国家試験試験委員、2006 年 - 現在まで日本社会福祉学会『社会福祉学』査読委員、2013 年 - 現在まで介護福祉士国家試験試験委員など多くの要職を務めてこられました。

さらには、ご多用な中、駒澤大学での教鞭のほか、国立秩父学園保護職員養成所、桜美林大学文学部、世田谷市民大学、横浜国際福祉専門学校、昭和女子大学人間社会学部、日本福祉教育専門学校、東海大学健康科学部、日本食糧栄養専門学校、東京都養育院、日本赤十字看護大学、東京医科歯科大学歯学部などにおいて非常勤講師として教鞭をとられ、多くの人材育成に携わられてきました。

これら、多くの公職や非常勤講師の依頼・要請が集まる背景には、伊藤先生の貧困・公的扶助研究の希少性や研究に対する社会的評価があるといえます。伊藤先生は、一貫して貧困問題・公的扶助研究にその学者人生をささげられ、多くの研究成果を残されてきました。その代表的なものを以下に紹介します。

《論文》

- 「公的扶助制度の沿革」 「公的扶助の概念と範囲」 『社会福祉士のための基礎知識Ⅱ』 2003年
- 「イギリスの所得保障制度における福祉権活動の研究(1) - ランカシャー州の『福祉権サービスモデル』の翻訳を中心として - 」 『駒澤社会学研究(第32号)』 2000年
- 「Poverty in the United Kingdom」 『駒澤社会学研究(第31号)』 1999年
- 「公的扶助研究の動向と課題」 『駒澤社会学研究』 1994年
- 「ある生活保護受給老人の生活保障問題と寺院・地域社会」 『日本仏教社会福祉学会年報』 1989年
- 「生活保護の動向と行政の取り組みについて」 『駒澤社会学研究』 1988年
- 「チェコスロバキアの社会保障概観」 『駒澤社会学研究』 1987年
- 「生活保護の現状と課題」 『ソーシャルワーク研究 Vol. 12 (No.2)』 1986年

《書籍等出版物》

- 『低所得者に対する支援と生活保護制度(第2版)』 (担当:共著) 弘文堂 2013年
- 『低所得者に対する支援と生活保護制度』 (担当:共著) 弘文堂 2008年
- 『臨床に必要な公的扶助論』 (担当:共著) 弘文堂 2006年
- 『社会福祉サービスと法』 (担当:共著) 建帛社 2004年
- 『公的扶助の現代的機能』 (担当:共著,範囲:15) 有斐閣 1997年
- 『老親をめぐる問題』 (担当:共著) 学文社 1994年
- 『児童福祉の法制・行財政』 (担当:共著) 蒼丘書林 1991年
- 『福祉行政における高齢化時代・家族の役割』 (担当:共著) ヒューマン・エコロジー研究所 1989年
- 『施設福祉と在宅福祉』 (担当:共著) 家政教育社 1988年
- 『社会と老人問題』 (担当:共著,範囲:27) 全国社会福祉協議会 1987年

近年では、弘文堂刊行の福祉臨床シリーズ『貧困に対する支援』『低所得者支

援に対する支援と生活保護制度』『臨床に必要な公的扶助』などのテキストの責任編集者にも就任されており、公的扶助研究分野における第一人者としての高い評価を受けられています。このように、伊藤先生は研究教育面のみならず様々な公職においても駒澤大学社会学科（1999年度以降は社会学科社会福祉学専攻）の教員として、駒澤大学の名声を高めることにも大いに貢献下さいました。

伊藤先生の教員としての勤務歴は35年ですが、学部・大学院も駒澤大学のご出身であり、助手時代も合わせると約半世紀近くを駒澤大学のキャンパスで過ごされたこととなります。駒澤大学が人生そのものといって過言ではない学者人生だったのではないのでしょうか。2022（令和4）年度をもって駒澤大学を退職されましたが、名誉教授としてまだまだ私たちにご指導・ご助言を賜りたいと思います。